**工藤道子さん　（浜通り医療生協　栄養士）**

今日は、皆様ご苦労様です。
ようこそいわきへおいでくださいました。
私は、工藤通子といいます。
今は育児休暇中ですが、仕事は浜通り医療生協病院の管理栄養士をしています。
私はいわき市で生まれ育ち今いわき市で生活しています。3 歳と生後 5 か月の娘 2 人と夫の 4 人で暮らしています。
原発事故訴訟の「完全賠償を求める会」の原告になっています。先日裁判所で意見陳述をする機会がありました。裁判の公判では、「事故後の福島に住む妊婦としての立場」で訴えました。その縁で、今日この場に呼ばれたのだろう、と思っています。

今日は震災当時と避難中のこと、裁判で訴えたこと、あと最近話題になった「美味しんぼ」に対して思ったこと、3 点について述べたいと思っています。
2011 年 3 月 11 日、震度 6 の地震が起きた時、その時まだ 4 か月だった長女と 2 人で、アパートにいました。その時も私は育児休暇中でした。その日の夕方遅くに帰ってきた夫と、私の実家へ移動しました。夜道を走る車中の FM ニュースで、福島第一原発で冷却停止の知らせを聞きました。その時、夫が「メルトダウン」と発したことを今でも忘れられません。夫は反原発運動に多少関わっていたので、何が起ころうとしているのか分かったのだと思います。「メルトダウン」の意味が分からなかった私が尋ねると、「スリーマイルだよ」 と言われ、遠い昔教科書で見た記憶が蘇りました。とっさに最悪な事故が起こり得る事態なのだとわかりましたが、まさかそんな最悪の事態は回避できるだろう、と楽観していました。
しかし願いは空しく状況は最悪の一途をたどりました。いわき市は大丈夫だろう、と思いたかった私も不安が次第に大きくなっていきました。
車のガソリンも少なく、避難しようにもできませんでした。不安に思いながらも、実家でみんな一緒にいよう、と考えていました。
しかし 3 月 13 目、石川県にいる妹が私たち家族を心配し、避難するなら車で迎えに行くと言ってくれました。まだ 4 か月の子供を長時間車に乗せることも心配でしたし、見知らぬ土地に行くことも不安でしたので、本当に迷いました。
しかし、「放射能が来る前にやはり移動すべきだ」と決断し、妹に車で迎えに来ることをお願いしました。夫は、仕事の関係でどうしてもいわきを離れることはできなかったことから、わたしと 4 か月の娘と 2 人で石川県へ避難しました。私の両親も、翌日妹が携行缶で運んでくれたガソリンを使って石川県へ避難しました。
避難は 3 月 15 日の早朝に出発し、高速道路は一般車は使えないと聞いていたので、（後で聞いたら避難するといえば通してくれたのだそうです・・・）渋滞する国道 6 号を南下し、群馬県の大田桐生 IC に着いたのが夕方 5 時、そこから高速道路に乗り、石川県七尾市に着いたのは夜 11 時半でした。避難に 16 時間もかかりました。
後で、知ったことですが、実は、15 日から 16 日にかけていわき市は非常に放射線量が高くなっていたことがわかりました。私たちが出発した時間帯です。もっと早い日に出発すべきだったと今も後悔しています。
避難先の石川県で 2 か月開放射能とは無関係な地域で過ごすことができたのは安心でした。しかし、育休明けの仕事もありましたし、いつまでもこのような生活を送ることもできませんでした。
また、家族は一緒にいなければならないという思いも強く、2 か月間の避難生活で心身ともに疲れてしまったこともあって、帰りたいと思い始めていました。いわき市の HP で放射線量の低下の推移を注視し、0.2 マイクロシーベルトという放射線量が続くようになったことで帰っても良いという判断をして、5 月 11 日にいわき市に帰ることにしました。
今家族 4 人の生活を送ることができています。日々忙しい生活を送っていますが、家族一緒にいられるという当

たり前の日常の中に幸福感を感じています。しかし決して放射能のことをわすれたことはありません。事故から3年経ちましたが、今でも私の日常生活から原発事故の影響は消えていません。放射能を忘れて生活することはできなくなっています。国と東京電力によって勝手に一方的に決められた賠償の支払いが終われば、それで終わりではないのです。私たちが抱えた問題は今でも、そしてこれからも続いています。
「完全賠償を求める会」の裁判では、妊婦の立場から私たちが抱えている問題について訴えました。
初めて裁判所に入り、法廷で判事と数を揃えて威圧感たっぷりだった被告の国と東京電力の弁護士たちの前で陳述しました。
私は、昨年妊娠し、昨年12月末に2人目の子供を出産しました。
妊娠が判明したとき、放射能の存在はやはり頭をよぎりました。
どの妊婦さんも妊娠期には抱く不安と同じなのかもしれません。
流産の可能性、染色体異常や障害の発生など、心配はたくさんありましたが、元気な赤ちゃんが無事生まれること、ただそれだけを願っていました。
生まれてくる赤ちゃんにとって出来得る限り最良の環境を提供してあげようというのが、私たち親の共通の思いだと思います。その思いで、妊婦さんは努力をします。カフェイン飲料を控え、もちろんアルコール摂取を辞め、体重コントロールに気を付けます。栄養バランスのとれた食事を摂り、食品添加物にも気を配り、インスタント食品も控えます。それらの気配りをした結果、しなかった場合と違いがあるかということは重要ではないのです。これから母親になる女性の産れてくる赤ちゃんへの思いがそうさせるのだと思います。
放射能の存在は母親のこの思いを傷つけるものだと思います。「この程度の放射線量なら問題ない」 という言葉は、母にとってもはや助けにはなりません。私は、「赤ちゃんにも放射線の影響はないはずだ。大丈夫だ」と、思っていますが、これは単なる「願い」に過ぎません。「確信」ではないのです。

これから成長していく子供たちに対して、罪悪感をもっています。子供たちは生まれる場所を選べません。育つ場所も選べません。本当ならこの地を離れて、家族で引っ越し放射能のことなんかまったく考えなくていい土地に移り住もうかと何度も考えました。しかし、現実問題として夫も私も簡単に仕事を辞め、無職になることもできません。
他県に住む友人から「近くの山で遊んだ」「外で雪遊びした」「栗拾いに行った」などと聞くと、環境の違いにうらやましくもあります。私も、昔親がよく山へ連れて行ってくれたようにもう少し大きくなったら山登りを体験させてあげたいです。山の中でキイチゴを見つけた時の嬉しさを今でも鮮やかに覚えています。アケビの美味しさも覚えています。しかしわたしは子供たちにきのこやアケビを見つけても放射能の存在故に「食べてはダメ」「食べられない」と教えてしまうでしょう。
子供たちはいつか私たち親の選択を知る時がきます。「移住しない。いわきで過ごす」 という私たちの選択が、将来、子供たちにどう評価されるのか分かりません。このような選択がこども達の成長、教育にとってどの様な影響が出るのかもわかりません。ただ親として子供たちに自信をもってここが最高の環境だよとはいえない環境に子供を置かざるを得ないことに罪悪感を覚えています。
以上が裁判で陳述した内容です。

さて、少し前に漫画の「美味しんぼ」がメディアで騒がれました。
鼻血のシーンや「低線量被ばくの危険性のため福島には住めない」というセリフが物議となっていました。
わたしも気になり、3週分の漫画と単行本で出ている「福島編」 を読みました。
納得できる内容もあるけれど、全体的に性急で雑な表現だな、というがっかりした印象をもちました。
このような騒動の場合、もっとも嫌なことは批判する側として自治体の意見や政治家の意見ばかりがメディアに紹介されることです。まるで「何が何でも福島に住まわせたいのだから言ってくれるな」というアピールに聞こ

えます。批判は逆効果にしか映りません。
福島に住む人がどう思っているかはメディアでは伝えられていなかったように思います。
ただ福島に住む人たちの思いは、一様ではないと思います。福島に住む人でないと、分からない思いというものが確かにあります。
ただ、福島県内と県外の対立は望みません。
福島県内には多くの対立があります。
放射線量の地域による汚染の違い、低線量被ばくに対する考え方の違い、支払われた賠償金の違い、避難してきた人たちと受け入れた地域の人たちの間などです。
低線量被ばくの危険性を不安に思いながらも様々な理由からこの地に住む決意をした人たちがいます。住むため食べるために放射能低減に努力をしてきてそれでも「美味しんぽ」のように「福島には住めない」といわれれば、気持ちは傷つけられます。
反対に、県外に避難した人たちもいます。放射能からは逃げられても、経済的苦労や周囲の無理解に苦しめられている人たちが多くいます。「福島には住めない」と言われれば、逆に自分たちの選択が正しかったのだと気持ちが楽になるのかもしれません。

福島が救われるのは複雑で難しい道のりです。
芥川賞作家で三春町の住職玄侑宗久さんが言っていました。
「今の福島の状態は泥沼だ」 と。なるほど、その通りだと思いました。
ただ「仏教の蓮の花は泥沼にしか咲かないのだ」とも言っていました。
素敵な言葉であり、救われる言葉です。

**<u>折居仁子さん　（平第６小学校教諭）</u>**

私は若いころ東京で教諭として働いていましたが、退職し、夫の転勤について歩き、しばらく専業主婦をやっていました。何年になるでしょうか。跡取りなので実家に戻り、親元に折角来たからと教員に復職し、今は一年契約の講師の立場で仕事をしています。ですから毎年毎年転々として、便利に使われています。いまも新しい学校に赴任したばかりで大変疲れがたまっておりまして、毎週こんな声になっています。お聞き苦しいかと思いますがお許しください。

私は学校の立場ということで、当時の学校の様子とか、いま私たちから見た子どもたちの様子を中心に話したいと思います。私の家も津波をかぶっていますので、それも含めてお話ししたいと思います。

私の家は四倉海水浴場から 500 メートル、漁港からは 300 メートル、明日皆さんの解散場所になる道の駅よつくらの目の前にあります。昔は海など見えなかったのですが、家がだいぶ壊されてしまったので道の駅が見えるようになってしまいました。非常に怖い感じがしています。

我が家も津波を被り、11 日の夜は避難所で過ごしました。先ほど工藤さんがおっしゃった情報は全くなく、一晩寒さに震えながら過ごしたことを覚えています。その頃、4 月から久之浜一小勤務との内示を受けていました。避難所で「久之浜から火が出た。火の海になっているらしい。」と聞き「来年は無職か…」と思いました。津波が去った後、町の中からガス爆発が起きて、一晩中、あちらからバン！こちらからバン！避難所になっていたために家族のもとに帰らず子どもたちと一夜を過ごした先生方が、一晩寝られずその音を聞きながら過ごしたということを後から聞きました。
次の朝、自宅へ行ってみました。町中泥とゴミだらけです。どぶのにおい。流された車が交差点をふさぎ、電柱に引っかかり、お店屋さんの戸口に突っ込んでいました。国道には船が乗っかり、道の駅の向かいのパン屋さんのシャッターには車が数台つっこんでどうしたらいいんだという状況でした。
自宅に入ってみると、大地震でものが散乱したあとに津波が来たので、それはもう大変

な状況でした。吐き気とたたかいながら泥をすくい、片っ端からものをゴミ袋に詰め、「家が残っただけまし」と呪文のようにつぶやきながら一日片付けました。夕方やっと畳を上げ、「水が出たら洗えるね」と被害のなかった姉夫婦の家で夕飯を食べ始めたとき、初めて原発事故のニュースを聞きました。「これは恐ろしいことになった」と 2 階に残った荷物から最小限のお泊まりセットを準備しすぐに自主避難しました。大混乱の生活の始まりです。

夫が長野に単身赴任中だったのでいったんそこへ向けて走り出しましたが、家族には申し訳ないのですが、途中で「私は公務員だから福島から離れられないんじゃないか」と言い出しまして、しばらく郡山近辺にとどまっていました。学校が再開しなかったので、あとで避難したんですが、公務員なのに福島を離れてしまったということは一生罪悪感として残ってしまうのかなと思います。でもその分私は娘たちを守った。できる限り、最大限の努力をした。その思いといつもたたかっている状況です。

学校は学年末の学習のまとめやら書きかけの通知表を残したまま、刻々と悪化する原発事故を注視し、自宅待機のまま春休みに突入しました。

宮城県は新学期を 4 月 20 日からとするとのニュースを聞き、当然福島県もと思っていたら、例年通り 4 月 6 日スタートする。3 月 28 日から出勤し年度末の事務整理をするようにと連絡が入りました。教諭職の異動は 8 月まで延期するが、講師は内示通り異動せよということでした。急いで通知表や指導要録など書類を書き上げ、教室を片付け、転勤の用意をしながら、自宅は津波でどうしようもないので 4 月から住む家を必死で探し、我が子の転校手続きをしました。

30 キロ圏内の久之浜一小は、春休み中、草野小の図書室を借りて新学期の準備をしていました。新学期は中央台北小学校の空き教室を借りてスタートすることが決まっていました。家を失った子はもちろん、30 キロ圏内ということで、ほとんどの子が市内のあちこちのアパートや避難所で生活しています。校長先生は連日教育委員会と掛け合い、ちりぢりになった子どもたちを北小にある久之浜一小へ安全に送迎するためのスクールバスの手配やら学校の引っ越しの段取りに追われていました。

赴任して最初の仕事は避難所だった久之浜中学校を掃除することでした。久之浜の人たちのほかに双葉郡からの避難者たちもいたそうで、どの教室もマットや布団が置いてありました。

家庭科室にはコンロが置かれ、たくさんの炊き出しが行われたことが分かりました。ここへの避難も急だったけれど、30 キロ圏内の自主避難要請で追い出されるように市内の湯本や内郷に移動させられたと聞きました。いつ戻ってこれるか分からないけれど、いつでも学校が再開できるように、地域の人たちも一生懸命働いてくれていました。小学校は理科室や社会科資料室、図書室、どこもかしこもものが倒れ壊れて散乱したまま、3.11 で時が止まったようでした。

先生方が、自分の教室を土日返上で一生懸命片付けていました。異動したばかりの講師 2 人で国語辞典、漢和辞典、図鑑、さしあたり授業に必要そうな本をまとめました。

4 日の月曜日は日課表や教室配置、引っ越しの段取り、入学式、教材教具の確認、新学期スタートに向けてたくさんの話し合いをしました。

5 日は学校の引っ越しです。必要な机やいすなどは陸上自衛隊が運んでくれました。作業効率を上げるため彼らは靴を脱ぎません。軍隊のあのブーツのような靴を履いたまま、久ノ浜一小からトラックに積み込み、中央台北小の教室まで靴のまま搬入します。作業としては迅速で非常に助かったんですが、それはもう、異様な光景でした。もともと 2 学級の学校ですが、教室が足りないため、1 学年 1 教室。しかも 2，３年生は広めの視聴覚教室を掲示板で仕切っただけ。4，5，6 年生は広い多目的教室をパネル板で区切ってつくった教室になりました。子どもの数の机を並べただけでいっぱいにでした。子どもたちが登校してくると教室は熱気むんむんです。でも放射線が心配で窓も開けられません。それはもう、ひどい状態でした。

6 日には被災校合同入学式を文化センターで行いました。市長のあいさつや自衛隊交響楽団の演奏がありました。引き続き別室を借りて始業式を行いました。３・１１以降、ばらばらだった子どもたちが、先生方が、一堂

に会して無事を喜び合い感激ひとしおでした。でも学校で行うのとは勝手が違います。往復だけでへとへとに疲れてしまいました。

7 日、8 日はスクールバス試験運行を兼ねてのオリエンテーションです。まだ教室の準備も終わらない中、子どもを預かり、保護者の不安を聞き、住所と通学方法を確認しました。

そして月曜日 11 日は、やっと学校が本格的にスタートしてのですが夕方また、震度 5 強の地震がありまして、水道も止まって、安全確保のために何日か休校になりました。でも職員はもちろん勤務ですから、この間に何とか授業の準備を整えました。

学校が始まると朝は渋滞の中スクールバスで登校。長い子は 1 時間バスに乗っています。4 台のバスを待っていると 8 時始業は無理なため、北小さんにチャイムを切ってもらって、久ノ浜小学校だけ独自の日程で行います。ノーチャイムで過ごしました。

久ノ浜中学校は隣の北中学校を間借りしていました。朝は、中学生と一緒にバスに乗ってきます。でも帰りは中学生の部活を保障するため朝とは違うバスコースになります。小学生にとっては何が何だかわからない大変な混乱ぶりでした。習いごとや医者通い、親の仕事の都合など、曜日によってはおばあちゃんの家に返してほしい。いろいろな要望があって、子どもたちも配車担当の先生も慣れるまでへとへと。配車担当の先生が過労で倒れて染むこともありました。また本来早く下校できるはずの低学年、特に入学したての一年生まで同じバスで帰るために、高学年の授業が終わるまで教室で過ごさなければなりませんでした。放射能の心配があり、校庭での体育どころか外遊びもできずストレスいっぱいの毎日でした。

そんな中、四月末に緊急保護者会が招集されました。学校を久ノ浜に戻したいという要望が地域から出たそうです。また学校や部活動を充実させたいという中学校の願いもあるようで　5 月の連休明けに戻ってはどうかと小中学校の校長先生からの提案がありました。しかし、放射線への不安とともに、いわき市当局も東電の責任者もだれも来ないということに対して、多くの怒りの声が出され保護者会は紛糾しました。とにかく今は戻ることは考えられないということで物別れに終わった保護者会でした。

そのころ町の復興のために国道沿いの商店街を再開させ、住民を町に戻そうという計画になりました。まだまだ復興は間に合いませんので小学校の校庭に商店街を作ろうということが検討され、決定していました。そのはまかぜ商店街、明日、見学してもらうことになっているようです。今その商店街が久ノ浜復興のシンボルになり、子どもたちを敷地内で見守ってくれています。

津波で家族を失った子、家を失った子、消防団の父親と一緒に車に乗って津波に追いかけられるように避難した子、そして避難した小学校でガス爆発の音を聞きながら一晩を過ごした子どもたち、さらに追い打ちをかける様に放射能の恐怖です。子どもたちは心に不安や傷を抱えていました。同じように教職員もそれぞれの事情をかかえていました。中でも幼い子を抱えて働く若い先生は職務のため避難することができず、かといって放射線の影響は心配でわが子をいわきに置くこともできず子どもだけを遠方の祖父母に預け土日に会いに行くなどストレスも疲労も多く重なり、2 人の先生が病休を取らなければならなくなってしまいました。

「何もかもが異常事態。あれだけの大震災だったのだから仕方がない。とにかくできることを精一杯するしかない。」そう自分を励まし、仲間と励まし合いながら夢中で過ごした 1 学期でした。

私は 1 年生の担任だったのですが、入学予定 31 人のうち実際に入学したのは 17 人。2 クラスの予定が 1 クラスで済んでしまったため 8 月に異動になりました。その夏休み、久之浜の小学校も中学校も久之浜に戻りました。また学校の引っ越しと、借りた校舎の片づけと先生方は大変だったことと思います。久之浜小中学校が中央台で始まるからと、それ
に合わせて仮住まいを見つけた人たちが、今度は逆にスクールバスで久之浜に通うようになりました。

被災校は避難のため子どもの数が減りましたが、市内の他の学校では原発近くの町村からの避難の子たちで、人数が増え、生徒指導が大変になっていました。とにかくこどもたちが落ち着かないのです。放射能の不安、住む家や雇用など生活の不安、新しい生活のストレス、親のもろもろの悩みや不安、ストレスがそのまま子どもに

影響するのを目の当たりにしました。

そしていま、震災・原発事故から3年がたちました。春の遠足に行けるようになりました。運動会も例年通り行えるようになりました。プールへも入れるようになりました。震災前と同じように過ごせるようになりました。福島県は盛んに学力向上に力を入れています。しかし本当に生活は落ち着いたのでしょうか。

私は昨年、別の学校で1年生を担任しました。体の未発達が気になりました。スキップができない。両足跳びができない。体をうまく動かせない子が多かったのです。幼児期に外で思いつきり遊ぶことのできなかった子どもたちです。そして、就学時検診の時、対話する人と目が合わせられない、落ち着きがない、口をしっかり開けて話せない、そんな子が多く見られました。保健の先生方の集まりで、多くの学校で同様のことが気になったと話題になったそうです。また、昨年の避難訓練で震災のことに触れたとき「ぼくは津波で親友をなくしたんだ」と1年生の子が涙まじりに言いました。当時4歳の1年生でもそんなことを言うのかと驚き、まだ震災は過去になっていないのだなあと思いました。

いま、久之浜のこどもたちは、町の除染も進み少しずつ戻ってきているそうです。それでも未だに仮設住宅や借り上げ住宅から通う子たちもいるので、3台のスクールパスが運行しているそうです。高学年の子たちは町づくり会議などに参加して元気に活動しているけれど、下学年のこどもたちは親の苦労を見ているためか家でいい子にして、学校でわがまま放題、暴れ放題なのを感じると、先生方が話していました。

今年私が担任している4年生に楢葉町から避難している双子がいます。隣のクラスのお兄ちゃんは低学年のうち泣いてぐずって大変だったそうですが、この頃はだいぶ落ち着きしっかりと生活できています。二人とも爪かみがひどく、避難してきてから爪を切ったことがないと母親が言っていました。うちのクラスの弟の方は足の爪までかじっているそうで、この頃イライラがひどく悩んでいると、昨日の家庭訪問で1時間近く話してきました。何に対しても投げやり、無気力、「どうせ、どうせ」が口癖、本人もお母さんも苦しんで、います。何とか自信とやる気を引き出したいといろいろ話し合ってきました。双子の兄へのコンプレックス、父親の単身赴任、窮屈な避難先でのアパート暮らし。やっと友達ができたのにいつか楢葉に帰らなければ、という寂しさや不安など、どうしようもない苦しさを抱えているのだなあと思いました。

蛇足ですが当時中学校2年生だった私の娘は、自宅で1人の時に地震に遭い、高台に避難し、津波を見ました。どんな様子だったのか、彼女の話を聞いても要領を得ず、全く様子が分かりませんでした。テレビで何度も映像を見たり、記録写真集で写真を見たりはしましたが、実際にその場にいなかった私たち家族は、「家は残ったし、幸い身の回りに犠牲者もなかった、テレビで見るほどのあれほどの被害でなくて良かった。不幸中の幸い」と思っていました。

そして昨年の暮れ頃、ようやく記憶も薄れ、「大変だったけど四倉はあの程度で済んで良かったね」と家族で気楽に話していたとき、「よくそんなことがいえるね。私、波にのまれていく人見たんだけど」と初めてはっきりと話すことができたのです。「軽はずみなことをいって悪かった」と謝りながら、やっと話す事ができるようになったのかと思いました。

彼女は震災直後5月初めに原因不明のじんましんが全身に出て以来、未だに薬を飲んでいます。いつもイライラし、四倉に帰るのも海に近づくのも極端にいやがっていました。

やむなく転校したことも不満だったようです。何度もカウンセリングを進めてみましたが頑としていやがったため、かかりつけの先生に相談したところ、前向きになる薬というものを処方してもらっています。ようやく落ち着いて生活し、養護教諭になりたいと志望校めざして受験勉強中です。合格できれば薬はいらなくなるかなあと今から楽しみにしています。

そして私も、「あんな大震災があったのだから仕方がないのだ」もっと大変な人がいる。「わたしはまだ恵まれている。」と常に前向きに、仲間を励ましながら、必死で働き、暮らしてきました。今になって「いつになったら休めるのだろう」と言いようのない疲労感を感じています。

震災の影響はすぐに出てくるものと、1年2年経ってあとから出てくるものがあると、震災直後の学習会でカ

ウンセリングの先生にいわれたことを思い返しています。学校という教育の場でまだまだ出てくるであろう震災の影響をきちんと見て、子どもたちをケアしていかなければと思っています。

**萩深雪さん　　（労災病院　調理師）**

続きまして私が勤務する栄養管理室の報告をします。

3 年前のあの日、地下にある栄養管理室がこんなに揺れるのは初めてのことでした。いつもの地震とは何かが違う、立っていられないほどの揺れでした。テーブルの上の食器や、棚のボール、鍋などがガチャガチャガチャーンと音を立てて落ちてきました。「ガスを止めてー」「みんな外へ避難してー！」調理場には怒号が響きました。

外のスロープを駆け上がり、病院の駐車場に出るとあたりの光景は一変していました。近くの家の瓦は崩れ落ち、電信柱は大きく揺れています。ふと足元を見ると、アスファルトはひび割れ水が噴き出しています。病院の屋上からは蒸気が噴き出していました。私は目に入ってくる現実を受け入れるのが精一杯でした。

揺れが少しおさまったので調理室に戻り、ライフラインを点検すると都市ガスが遮断されていたので、夕食は蒸気釜でお湯を沸かし、非常食のアルファ米をお出ししました。また、だめになった食材は代わりのもので対処し、食事を提供しました。

配膳下膳は、エレベーターが止まったまま動かないため、地下から 6 階まで病院にいる職員、または駆けつけてくれた職員で協力し、手渡しリレーで食事を提供しました。

その日は院内待機となったので、残ったアルファ米で職員用のおにぎりを作り、各所に届けました。そして、午後 10 時に院長の解散宣言があり、その後自宅に帰りました。

翌日には都市ガスからプロパンガスに入れ替えをし、ガスを使った調理ができるようになり、ご飯も炊けるようになりました。また、水道は市全域が断水でしたが、病院のタンクは優先的に給水をしていただきました。節水のためデスポの食器で食事を提供しました。病院に泊まっている職員のため 1 ヶ月くらい食事を提供しました。当院は海岸沿いから 9 ㎞内陸に位置しているため、津波の被害は免れました。しかし、東京電力福島第一原子力発電所からは 45 ㎞に位置しており、3 月 11 日に緊急事態宣言が下されてからは状況が一変しました。半径 3 ㎞圏避難指示、半径２０㎞圏内屋内避難指示、３月 12 日 10 ㎞圏内避難指示、そして 1 号機水素爆発、半径 20 ㎞避難指示、3 月 14 日 3 号機水素爆発、3 月 15 日 2 号機爆発音、4 号機火災発生、半径 20～30 ㎞圏内屋内避難指示。

皆に動揺が走りました。

私どもの職場は正規職員 7 名、嘱託が 4 名で働いています。

そんな中、夜遅く私の家の電話が鳴りました。嘱託の職員さんからでした。

「私、どうすればいいの。近所の人たちがどんどん避難していなくなっていくの」

私はこう答えました。

「労災病院からは、まだ避難指示が出ていないから、入院している患者さんたちがいます。患者さんがいる限り、私たちは食事を提供しなければなりません。労災の近くの避難所に入るか、休憩所に泊まり、仕事に従事してください」

私は家の電話が鳴るたびに、同じ言葉を何度も繰り返しました。自分だけ残り家族を避難させる人、母だけを残していけないと家族全員残る人。残った人も避難した人も皆それぞれに悩み、苦しみながら病院に勤務していました。

また嘱託の家族の人などはこんなやすい賃金なのに働かせるのかという人もいました。

また、納入業者さんも同じです。次から次と在庫の食材を使ってくださいといって避難していきました。

私たちはその大切な食材を冷凍したり、頂いた避難物資を使い、献立を組み替えながら患者様に食事を提供し続けました。

みんなが避難する中、1 軒の八百屋さんが病院に野菜を納入し続けてくれました。あの業者さんがいなかった

ら患者様に野菜なしの食事を提供することになったと思います。
3 年たった今でもあのころの事を思い出すと胸が苦しくなります。残った人たちで必死に頑張っていると、3 月の末頃には患者さんも少しずつ戻り始めました。

そして 4 月になり、近所の人たちも少しずつ戻ってきました。しかし人が戻っても元の生活には戻れません。福島の食材は食べられなくなり、子ども達は外で遊べない、子ども達は不安から親から離れられない。そんな子どもを預けて職員は働き続けなければなりません。私たちはこんな過酷で大事な職場でありながら、嘱託職員の賃金の低いことに改めて気づかされました。

そして組合を通して病院側に待遇改善を要求しました。そして 15 年間あがらなかった賃金改善を勝ち取ることができました。勤続 3 年で 10 円、5 年で 20 円、7 年で 30 円、10 年で 40 円、15 年で 50 円アップしました。私たちは組合の大事さ、すごさ、そして訴えることの大切さを学びました。
これからも職場の仲間と一緒に患者様によりよい食事の提供するため、そして自分たちの職場を守るために組合活動を続けたいと思います。

最後に、いま一番の課題をお話ししたいと思います。

原発事故以来、医師をはじめ看護師、調理師などさまざまな職員の人材が確保できず、残業の日々が続いています。

あの日から 3 年が過ぎ、いま強く思うことは、この体験をした私たちだからこそ原発はなくすべきだと福島から発信しなければなりません。そしてどうすれば国の方針を変えられるかみんなで考え、一緒に行動しましょう。そして安心して暮らせる福島、日本を取り戻しましょう。